

**Research into Japanese Ability: The Case of Students at  
Toyohashi University of Technology  
—— Proverbs, Kanji Idioms,  
and Kanji Radical Identification, etc**

**Hironobu Hibino**

It is said that there has been a decline in the scholastic ability of university students in Japan, and the Japanese ability of those students today has declined as well. With this in mind, Nakamori and Yamada conducted research into the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji in 2005. And we announced the results in the article.

Therefore, we strongly felt the necessity to conduct research into the Japanese ability of students including kanji ability. So we conducted research on the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji, proverbs, honorifics, kanji idioms, kanji radical identification, kanji stroke order, etc in 2006.

The results of this research are presented in this bulletin and are divided into four separate articles.

The authors of these and the topics are as follows:

General Remarks: Yasuyuki Nakamori

Junior High School Level Kanji Ability: Yoko Yamada

Proverbs, Kanji Idioms, and Kanji Radical Identification, etc: Hironobu Hibino

Honorifics, Kanji Stroke Order, etc: Yuko Suzuki

# 大学生の日本語能力の現状・各論（ことわざ ・慣用句・四字熟語・部首） —豊橋技術科学大学生の場合

日比野 浩 信

豊橋技術科学大学における、「日本語法」受講生を対象とした日本語能力調査のうち、「ことわざ・慣用句」「四字熟語・部首」について報告しておきたい。

## I 「ことわざ・慣用句」

漢字などとは対照的に、学習過程において「ことわざ・慣用句」の反復練習などは行われまい。しかし、テレビのクイズ番組などでは国語的分野の問題として、よく「ことわざ・慣用句」が出題される。つまり「ことわざ」は、一般的な常識でありながら、知らない人が増えてきていることになろう。

今回の調査においても、全6回の調査の平均点のうち、「四字熟語」の43.5点に次いで、49.4点と「ことわざ」の正答率は低い。調査対象者は全体で267名、内、留学生が11名含まれている。最高点は83点、最低点は6点。ただし、この最低点6点というのは留学生である。日本人学生の最低点は16点であった。出題には、高校生の就職試験用問題集などを参考にした。出題、得点、平均点は以下の通り。

| 出 題                | 得 点 | 平均点 (10点換算)  |
|--------------------|-----|--------------|
| 問1 ことわざ穴埋め (漢字・選択) | 20点 | 13.5点 (6.8点) |
| 問2 ことわざ穴埋め (漢字・記述) | 20点 | 7.6点 (3.8点)  |
| 問3 意味することわざを答えさせる  | 10点 | 3.4点         |
| 問4 使い方の正否 (○・×)    | 10点 | 7.7点         |
| 問5 ことわざの意味 (選択)    | 10点 | 5.9点         |
| 問6 ことわざ、慣用表現の漢字の読み | 10点 | 5.2点         |
| 問7 慣用表現穴埋め (漢字・記述) | 10点 | 5.6点         |
| 問8 慣用表現の補完 (動詞)    | 10点 | 2.1点         |

上記表から気付かれる事もある。

①同じ穴埋めでも選択（問1）と記述（問2）とでは約2倍の得点差がある。また、記述に拠る漢字補充では、ことわざ（問1）より慣用句（問7）のほうが得点率が高い。

慣用句はまさに「慣用」であり、日常会話の中でも用いられようが、ことわざを用いる表現は、日常的にはより少ないといえようか。

②慣用句の補充でも、漢字一字を入れさせるもの（問7）と語句（動詞）を入れさせるもの（問8）とでは、漢字一字を入れさせるほうが得点が良い。

答えるべき文字数の少ないほうが正答率が高いのは、むしろ自然であろう。また、これにより、正確な認識・利用よりも、「うろ覚え」や誤認が多いことがうかがわれる。

③ことわざそのものを答えさせる問題（問3）は正答率が低い。

状況に応じたことわざの、日常表現における利用頻度の低さに起因していよう。また、②とは異なり、知らなくては答えられない。認知度の低さが明白となった。

④慣用句の語句補充（問8）は、ことわざ全体を答える（問3）よりも得点率が低い。

表現として身に付いていない、「うろ覚え」が多いことの証左となろう。

⑤ことわざの使い方が正しいか否かの判断（問5）と、意味との結びつけ（問6）は、比較的得点率が高い。

おそらくことわざは、日常的には、その使用状況から意味を察することができる場合が多い。実際にことわざに出会った場合には、理解に苦しむということは少ないのかもしれない。

では、以下、各設問ごとにみていこう。本来ならば、「ことわざ」と「慣用句」は区別されるべきではあるが、便宜的にまとめて取り扱うこととする。

なお、稿者は10数年にわたって工業系の高等学校（非常勤講師）でも国語の授業の一環として、敢えてことわざを取り上げたことがあり、その際の経験をも、出題と分析に際しての参考としていることをお断りしておきたい。

#### (1) 問一 ことわざ穴埋め（漢字・選択）

ことわざの漢字一字を空白にし、そこに適する漢字を、選択肢から選ぶ問題である。全部で10問、その正答率は次の通り。なお、以下、特に断らない限り、平均点、誤答例、正答率のデータに留学生は含まないこととする。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 10.9% | 2 | 94.8% | 3 | 36.0% | 4 | 18.0% | 5  | 97.4% |
| 6 | 89.5% | 7 | 75.7% | 8 | 85.4% | 9 | 54.7% | 10 | 94.0% |

正答率が最も高いのは5「□に小判（猫）」であった。以下、正答率の高い問題は、よく知られていることわざ（慣用句）である、という以外あるまい。逆に最も正答率が低かったのは1「□より育ち（氏）」で、正答率は10.9%。誤答で最も多かったのは「家」を選ぶもので、正答者に4倍する40.0%。内容的な推測から、「育ち」に関連あるものを選んだのであろう。しかし、「より」という比較があるにも関わらず、「育ち」と類を同じくする「家」を選んだのは、読解力不足であろうが、「家柄」のように理解した可能性もある。仮に「家柄より育ち」と解したとすれば、

意味的には正しいことになる。

同様のことは4「角を矯めて□を殺す」(牛)でもいえる。選択肢中のダミーに角のある動物「鹿」を入れたところ、「鹿」を選んだのが35.6%と、正答の約2倍にのぼる。他の誤答に、「殺す」から生物であると推測したのであろう「駒」「猫」「豚」、中には「人」という物騒な誤答もあった。「矯めて」の意味を理解していないことは歴然としている。

また、聞いたことがありそうなことわざとして、3「枯れ木も□のにぎわい」を出題した。正答率36.0%とやや低め。選択肢に「花」を含んである。誤答のうち「花」を選んだのは43.1%、正答を7%も上回る。これには「木」と「花」が関連深い言葉である上に、「にぎわい」という言葉に引かれての誤った記憶の可能性はある。しかし、「つまらぬものでも無いよりはまし」という意味からは合理的ではない。つまり、意味を知っているのに誤りではないことは明白であろう。これは、「氏より育ち」の誤答例とは逆の傾向である。全くの思い付きであるが、この誤りの要因の一つとして、あの『花咲かじいさん』の「枯れ木に花を咲かせましょう」が、例え無意識であったにせよ念頭にあったのではないかと考えている。恐らくは幼少期に接したものが、記憶の片隅に残されているのであろう。もし、この「思いつき」が正しいとすれば、幼少期の「学び」の大切さ、また、情報の必要性が、図らずも現わされてことになるだろう。

これとは逆に、選択肢によっては、あやふやな記憶でも正答を得ていると思われる例もある。10「出る□は打たれる」である。これを「出る釘は打たれる」と誤る例が少なくはあるまい。「杭」との音の類似、出っ張っていると危険である、というイメージも手伝っての誤りであろう。「出る釘」を掲出する辞書もある。辞書に載った以上は誤りとはいえなくなってしまうが、ここでは、その「揺れ」をも考慮して、選択肢に「釘」を含めなかった。正答率は実に95.6%。選択肢の中に「釘」が含まれていたら、この結果は大いに異なるものとなったであろうことが推測される。

問一は、選択肢から選ぶという形式であったからこそ正答率が67.5%であったと考えると、そのことわざを知らなくても、何となく意味から類推して選択する、あるいは、おぼろげな音声の記憶に近いものを選択することも可能であり、ことわざを「知っているか否か」となれば、そのパーセンテージはかなり下がるであろう事が推測されるのである。

以下、同様の分析と考察を繰り返すことになるが、紙幅の都合もあり、特に特徴的なものでもない限り、一々取り上げることはせず、簡単な報告に留めたい。

## (2) 問二 ことわざ穴埋め (漢字・記述)

問二は選択肢を設けず、漢字一字を記述させた。平均点は選択穴埋めの約半分の3.7点。「勸」で答えることが出来ず、問一に比べて正答率が下がるのは自明である。10問を出題し、その正答率は以下の通りである。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 4.5%  | 2 | 72.0% | 3 | 18.0% | 4 | 15.0% | 5  | 37.5% |
| 6 | 19.9% | 7 | 4.1%  | 8 | 78.3% | 9 | 37.5% | 10 | 68.5% |

最も正答率が高いのは8「□に画いた餅 (絵)」であるが、最低は7「九牛の□毛 (一)」であった。8はよく知られたことわざであるに違いないが、「画いた」という言葉から「絵」を導き出

した可能性もある。よって、「餅」を空欄にしていたら、恐らく正答率は想像以上に低かったのではなかろうか。7は、「知らなかった」としかいいようがあるまい。これに次いで正答率の低い1「□で鼻をくくる（木）」なども、「鼻」にも「くくる」にも一般的な連想の結びつくことのない「木」が推測されなかった結果であろう。

「推測」の結果を考える例として3「□作って魂入れず（仏）」をあげておこう。正答率は18・0%と低い。複数あった誤答例としては、以下のようなものがある。

|   |     |       |   |       |   |      |
|---|-----|-------|---|-------|---|------|
| A | 形・型 | 14.6% | 器 | 10.5% | 箱 | 1・5% |
| B | 体   | 4.5%  | 像 | 1・9%  | 人 | 1・5% |
| C | 刃・刀 | 1・9%  | 墓 | 0・8%  | 米 | 1.1% |
| D | 心・魂 | 1・1%  |   |       |   |      |

Aはいわば「入れ物」系で26.6%、正答率をも上回る。「中に入れる」という発想であろう。Bは「人体」系で7・9%。「像」などは「惜しい」誤りで、「魂」から単なる「入れ物」ではなく「人」が発想されたと推察できよう（「体」や「人」は「作れない」ことには思い至らなかったのか）。Cはいわば「入魂」系。「刃」「刀」などは、「刀は武士の魂」や、一振りの刀に魂を込める刀鍛冶、村正のような「妖刀」伝説などへの連想が働いたか。「墓」と魂（あるいは霊）は結び付き易いが、安易な発想というべきであろう（理論的には、「墓」は遺体埋葬によって「魂」が宿るのであり、敢えて入れるものでもない）。「米」が複数あるが、「精魂込めて作る」という発想であろうか。Dはいわば「同類」系。「心」「魂」を別のものととらえ、「心」の中に「魂」が入れ籠に存在するものという理解をもっているのかも知れない。もしくは、「（折角）魂を作っておきながら、その魂を（然るべきところにちゃんと）収めない」のような意味と考えたためであろうか。

いずれにせよ、発想・連想に拠る、ことわざの「作り出し」の過程がうかがわれよう。

### (3) 問三 意味することわざを答えさせる

意味をかかげて、その内容を表すことわざを答えさせた。5問のみの出題で、それぞれの正答率は以下の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |   |      |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|
| 1 | 42.7% | 2 | 39.0% | 3 | 41.2% | 4 | 28.8% | 5 | 6.0% |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|

最も高い1「大きいだけで役に立たないこと（うどの大木）」でさえ正答率は42・7%。「木偶の棒」という誤答が目立った。最も低い5「好きゆえに良くみえること（あばたもえくぼ）」などは6・0%。「あばた」という言葉そのものが、日常会話の中で聞かれることがないようである。古の言葉（といっても、この場合は長くてもほんの数十年といった程度であるが）に触れていないことは明白で、昨今の文学離れ・古典離れの影響もあろうが、父母・祖父母といった異なる世代の人との会話が減っていることもその原因の一つといえるような気がしてならない。

ことわざ「創作」の例として、3「風流なことより実利をとること（花より団子）」の誤答「粋で飯は食えぬ」を掲げておこう。念のため複数の『ことわざ辞典』を確認したが見出せなかった。一見、このようなことわざが実際にあるかのような気分さえさせられる、うまい言い回しを「作

り出し」ているとはいえまいか。「知らない」ことを「誤魔化す」ことくらいはできそうである。「苦肉の策」であろうか、「性質」によるものであろうか。

いずれにせよ、日常的に、ある内容を示す言葉として、ことわざを使うことが無いということは明らかである。

#### (4) 問四 使い方の正否

使用例を提示して、その使い方の正否を○×で答えさせる問題で、平均点は7.7点と高い。自らことわざを使うことはできなくとも、用いられたことわざの正否は比較的判断し得ていることになる。10問の正答率は以下の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 85.0% | 2 | 78.3% | 3 | 85.4% | 4 | 90.6% | 5  | 95.5% |
| 6 | 90.6% | 7 | 35.6% | 8 | 57.0% | 9 | 81.6% | 10 | 53.6% |

最も高い正答率は5「もともとあいつが悪いんだから、身から出た錆さ (○)」であったが、誤答全12名のうち、11名が留学生であった。最も低いのは7「彼は手先が器用で、木に竹をつぐような人だ (×)」であった。単なる「比喩」としては、正しいように感じるのであろう。このことわざを全く知らなかったというほかない。次いで低い正答率は10「彼が困っていたが、情けは人のためならずというので、あえて助けるのをやめた (×)」である。誤解が多いことが周知であるため、敢えて出題した。50%台というのは、「知っている」「知らない」ということに起因する正答率というよりは、言葉として知っているが、使い方が誤っていることに起因する正答率と考えてよからう。よく用いられるものの、誤っているわけである。誤解の要因を考えてみよう。まずは内容であるが、「その人」の為にならないとして、甘やかさないという態度は、道義的にはむしろ間違いではない。このことも一因であろう。また、文法的な解釈も考えられる。「為ならず」の「ず」が打消しの助動詞であるから、この肯定形は「為なり」となり、「なり」が断定であることも明白である。そして「人」は他人の意であり、その対義は「我・己」である。すなわち、「人の為ならず=己の為なり」という解釈は、容易に導き出せるはずである。そこを、「人の為にならぬ」のように、勝手に「に」を含め、助動詞の「なり」を動詞の「なる」に誤って、「(その)人の為にならない」のような解釈を作り出していると推測できるのである。身勝手な解釈と、文法事項等に対する無知による誤解から流布したのであろう。

ただ、このような誤解は、ことわざに限ったものではあるまい。

#### (5) 問五 ことわざの意味

ことわざと意味を結びつける問題である。問題と選択肢が同数でありながら、平均5.9点というのは、思いのほか低かった。各問題の正答率は以下の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 70.4% | 2 | 57.0% | 3 | 46.7% | 4 | 47.9% | 5  | 43.1% |
| 6 | 20.2% | 7 | 73.8% | 8 | 54.7% | 9 | 9.7%  | 10 | 10.1% |

正答率が最も高かったのは7「毛を吹いて疵を求む (好んで人の弱点をあばくこと)」であった。調査後に質問したところ、ほとんどの学生がこのことわざを知らなかったことから、「疵」が「欠点・弱点」に結び付きやすかったために、「疵を求む」を「欠点・弱点を探す」として解釈した

結果の正答率であろう。一方、最も正答率が低かったのは9「飼い犬に手を噛まれる（大事にしていた部下に裏切られること）」であった。正直なところ「まさか」という思いである。この誤答として最も多かったのは4「月夜に釜を抜かれる」の正答である「ひどく油断すること」を選んだもの。確かに油断からペットなどに怪我をさせられるといった話は有りそうであるが、このことわざを知らなかったことは明らかである。全体の正答率が低いのは、知らないことわざをまず、自分にとっての合理的な解釈で内容推測した誤解によって解答、消去法で残りを当て嵌めたためであろう。そのために、一つの誤答が次の誤答を生じさせ、その連鎖が全体の正答率を下げたのではなからうか。(4)における誤答例に類似していることが指摘できよう。

(6) 問六 ことわざ、慣用表現の漢字の読み

ことわざ、慣用表現に使われる漢字の読みを出題、設問は以下の5問、10点換算による平均点は5・2点、漢字の読みの出題としては低い。各問題と正答率は以下の通り。

|   |       |   |      |   |         |   |       |   |       |
|---|-------|---|------|---|---------|---|-------|---|-------|
| 1 | 一役買う  | 2 | 四方山話 | 3 | 逆ねじをくわす | 4 | 虚をつく  | 5 | 固唾を飲む |
|   | 77.9% |   | 8.2% |   | 53.6%   |   | 60.7% |   | 41.9% |

最高正答率の1「一役買う」は、「いちやく」という誤読を予測しての出題であった。間違えは少なかったが、誤答のほとんどが「いちやく」であった。最低正答率は2「四方山話」である。誤答の割合は一々掲出しないが、「四方」を「しほう」「よんぼう」、「山話」を「さんわ」とする誤りが大半を占めている。調査後、「久しぶりに会った友人達と、ヨモヤマバナシに花を咲かせた」という例を出してみたが、このような言い回しには触れたことがないという。これは、先にも述べたように、その表現を当たり前のものとする世代・知識層とのコミュニケーションが欠如しているために、これまで触れることなく過ごしてきたといえるのではなからうか。3～5の問題の誤答としては、それぞれ「ぎゃくねじ」「うそ」「かたつば」がやはり目立った。予測していた通りではあったが、知識不足は深刻であろう。

(7) 問七 慣用表現穴埋め（漢字・記述）

問五の文中で触れたが、ことわざの意味を提示した上で空欄を補充させるという問題である。出題は5問、平均は10点換算して5.6点。正答率は次の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | 69.7% | 2 | 54.7% | 3 | 43.8% | 4 | 68.2% | 5 | 37.8% |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|

正答率が最高の1は「□を掛ける／出題を予想する（山）」という問題である。日常的に、いうまでもなく試験時を中心によく使う表現の一つで、正答率が高いのは当然である。誤答として目立ったものは、「鎌・釜」と「願」であった。ともに「カマを掛ける」「ガンを掛ける」という語感が身に付いているのであろう。誤答とする表現の意味を理解せずして「～を掛ける」という表現を探したのか、あるいは、誤答を承知の上で記述し、あわよくば正答の可能性を求めたのであろうか。最低正答率は5「□うちわ／安楽なくらし（左）」。誤答例としては「右」や「両手（あるいは「両」）」が正答を上回る44.2%、また、不正答の71.1%が空欄であった。「右」などは、このような表現の存在を臆気に知っていた可能性もあろうが、空欄となれば、思いつきもしなかった、すなわち、知らなかったのである。

## (8) 慣用表現の空欄（動詞）補充

出題は5問で、計10点。正答率は以下のように低い。

|   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | 69.7% | 2 | 54.7% | 3 | 43.8% | 4 | 68.2% | 5 | 37.8% |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|

最も正答率の高い2「的を一た答え／正しい、正確な（射た）」は、恐らく「当を得た」との混同から、「得た」という誤答が多かることを想定しての出題であった。ただ、思ったより正答率が高い。間違いやすい表現として取り上げられることが多いためかもしれない。最低正答率は5「押しも一大スター／実力があって堂々とした様子（押されもしない）」で、誤答として最も多かったのは「押されぬ」とするものである。全体の50.6%、誤答の52.0%が「押しも押されぬ」としていた。空欄とするものも多く、全体の24.0%、不正答の24.6%を占めた。この二つの誤答例だけで全体の76.0%、不正答のうち76.6%であった。同じような誤りが多いことが明らかで、「越すに越されぬ」や「やむにやまれぬ」などの語感に引かれての誤りであろう。よく知られた慣用句の中でも、「よく誤られる」ものを出題した結果である。

## (9) まとめ

取り立てて教えられることが少ない「ことわざ・慣用表現」は、何よりその言葉を「知っているか、知らないか」であり、ひいては日常的に「使うか、使わないか」である。今回の調査の結果を見る限りは、「ことわざ・慣用句」の能力は低いといわざるを得ない。

## II 「四字熟語・漢字の部首」

### 1 「四字熟語」

次に、「四字熟語」について。概ねその傾向は「ことわざ・慣用句」に類似しており、簡単な報告に留める。

「四字熟語」も、日常の使用がその能力に大きく影響していることは「ことわざ・四字熟語」と同様である。平均点43.5点は、全6回の調査の中で最低である。「使用頻度の低さ」「馴染みの無さ」が、今回の調査の結果に反映しているものと考えたい。「ことわざ・慣用表現」でも同様であるが、学んで（教えられて）いなければ、無理もない。

また、「漢字」がネックとなって、より使用を遠ざけているといえよう。小学校・中学校で習う漢字の範囲内の熟語でさえ、低使用率であろうに、「難しい漢字」の熟語となれば、敬遠は想像に難くない。また、聞き慣れぬ四字熟語が違和感を覚え、却って伝わり難いことは、力士の昇進伝達式や政治家の答弁などでよく感じられることであろう。

ともあれ、「四字熟語」は、記憶することを殊更に否定するような教育の場においては、能力的に向上するはずもなく、特殊な場面において自らのステータスの表現の為にわざわざ調べ、探し出して使うとの感が強く、知らなくてもさほど恥ずかしいとは感じないほどの「小難しい」言葉になってしまっていないだろうか。

では、今回の調査についてまとめておきたい。調査対象は265名、うち海外からの留学生が13名（データから除く）であった。出題は大きく5問。以下の通りである。



| 出題                | 得点  | 平均点（10点換算） |
|-------------------|-----|------------|
| 問1 四字熟語穴埋め（記述）    | 20点 | 9.5点（4.8点） |
| 問2 四字熟語穴埋め（選択）    | 10点 | 6.0点       |
| 問3 四字熟語穴埋め（数字・記述） | 10点 | 5.3点       |
| 問4 四字熟語の読み        | 20点 | 7.0点（3.5点） |
| 問5 四字熟語の意味（選択）    | 10点 | 6.6点       |

まずは、上記の表から幾つか指摘しておこう。

①穴埋め問題は、記述（問1）より選択（問2）のほうが得点率は高い。

うろ覚えでも選択でき、知らなくても「勘」で答えられる。ことわざの場合と少々異なるのは、漢字からの意味の推測、音からの推測が可能である点であろう。しかし、記述・選択の場合とも、ことわざよりも低い得点率であることから、うろ覚えや、意味・音からの推測を加味しても、四字熟語の能力は低いといわざるを得ない。

②穴埋めは、漢字一般（問1）よりも漢数字に限定（問3）したほうが得点率が高い。

ただし、今回の能力調査全体から見れば「五十歩百歩」といったところであろう。

③「四字熟語」の読み（問4）は、一般的な漢字以上に読めない。

まずは、漢字能力の欠如であろうが、やや特殊な読み方（呉音読みなど）は特に読みづらいようである。ただ、その読み方がむしろ通例的な読み方であり、学習の応用的成果ではなく、「知っている、知らない」に左右されていることは明らかである。四字熟語ではなくとも、例えば「憧憬（ショウケイ）」を「ドウケイ」、「重複（チョウフク）」を「ジユウフク」と読むなどはむしろ一般化しており、このように一般化して辞書によっては掲出しているとなれば、もはや誤りとはいえなくなってしまう。そうなれば、誤りが許容されることになってしまうわけで、望ましいこととは思われない。

④四字熟語の意味の選択は、比較的高得点である。

先に述べたように、漢字から意味の選択が可能であるとすれば、そこから近い意味を選ぶことは、比較的しやすかったのかもしれない。意味を書かせる、あるいは、意味からふさわしい四字熟語を書かせるなどを出題した場合には、おそらく得点率はかなり低かったであろう事は推測できる。

では、各設問についての分析に移りたい。出題の傾向としては、「ことわざ・慣用句」と同様、高校生の就職試験用の問題集などを参考とした。表意文字たる漢字からその意味を推測するなどが比較的しやすいため、あまり簡単なものは選ばないようにした。

煩瑣を避けるために、誤答例や割合の算出、細かな分析は出来るだけ差し控えておく。

（1）問1 四字熟語穴埋め（記述）

四字熟語のうち1文字を空欄とし、適当な漢字を書かせる問題を10問出題した。各問題の正答率は以下の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 58.9% | 2 | 83.0% | 3 | 21.1% | 4 | 68.3% | 5  | 67.9% |
| 6 | 52.5% | 7 | 7.5%  | 8 | 73.2% | 9 | 18.1% | 10 | 0.8%  |

最も正答率が高かったのは2「単□直入（刀）」で83.0%。「簡単な四字熟語」といえるであろう。

出題の意図としては、誤答例として最も多かった「当」とする誤りを期待しての事であった。他の誤答例としては「刃」が複数見受けられた。「当」の場合は「タントウチョコニュー」という読み（あるいは「音」）がわかっていた上での誤りであり、「刃」は単に漢字の誤りであろうと考えられる。これに対して10「汗□充棟（牛）」は、最低正答率の0.8%。誤答例として「涙」「流」「発」などが多く目に付いたが、熟語の意味内容とは全く関係がない上に、その読み（音）にさえ共通性がない。全て「汗」からの連想であり、全く知らなかったというのが正しかろう。

知らない四字熟語に出会ったときの考え方として、読み（音）を知っていれば、そこに同音の漢字を当てはめられようが、全くわからぬ場合、象徴的な漢字の類義語的な漢字や、その主述関係になる漢字を当てはめようとする。他にも例えば9「□頭狗肉（羊）」の誤答例として上がる「牛」「鶏」などは、類義語的誤りといえるし、3「□上楼阁（砂）」の誤答として多く見られた「城」もやはり類義語的、「天」「雲」は自分が知っている熟語（あるいは存在しそうな熟語）での、語感的な当てはめであるが、修飾関係であるともいえる。1「我□引水」（田）の誤答「流」などは、主述的とも類義語的ともいえよう。

### (2) 問二 四字熟語穴埋め（選択）

各問題ごとに5つの選択肢を用意した。その選択肢は全て同じ音の漢字を並べた。例えば「ア、感 イ、貫 ウ、完 エ、勘 オ、観」という具合である。これにより、すべて「ショシカンテツ」という読みとなり、語感的な選択は不可能となる。そのため、わからぬ場合には内容的な推測による選択を行うことになろう。各問題の正答率は次の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 87.2% | 2 | 44.2% | 3 | 51.3% | 4 | 84.2% | 5  | 75.1% |
| 6 | 59.6% | 7 | 43.4% | 8 | 35.8% | 9 | 43.0% | 10 | 49.8% |

最も正答率の高いのは1「初志□徹（貫）」、次いで高かったのが4「意味□長（深）」であったが、これらは記述問題であったならば、同音別漢字の誤答が目立ったと推測される。しかし、選択肢の場合は、かなりの高確率で正答を得られることがわかる。3「五里□中（霧）」などは、案の定「夢」とする誤答例が最も多かった。音がわかっている、意味が解かっているというよい例であろう。より馴染みの薄い四字熟語は言うまでもない。最も正答率の低かった8「山□水明（紫）」などは、「詩、姿、視、死、紫」の選択肢の中で「姿」または「視」を選んだ間違いが目立つ。「山」の「姿」ととらえた修飾関係系の誤り、「明」に対して「視力」などに関連させた類義語的な誤りであろう。

### (3) 問三 四字熟語穴埋め（数字・記述）

四字熟語の数字を空欄として、当てはまる数字を記述させた問題で、正答率は次の通り。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 59.6% | 2 | 1.5%  | 3 | 89.1% | 4 | 35.1% | 5  | 19.6% |
| 6 | 24.5% | 7 | 56.2% | 8 | 65.7% | 9 | 65.3% | 10 | 78.9% |

最も高い正答率は3「波乱□丈（万）」で、次いで10「千載□遇（一）」。共に日常的によく用いられる。対照的なのが「葦編□絶（三）」である。「葦編」のみならず、「三」を「何度も」とは解していないようで、「一日三省」を例にあげると、「一日に三回反省する」という答えが返っ

てきた。「三」という正答を入れた者の中にも、日本のことわざなどは奇数が多いというイメージから「三」を入れただけに過ぎない者もいたかもしれない。いずれにせよ、推測できない数字は「勘」に頼るほかないというのが実情であろう。

(4) 問四 四字熟語の読み

理屈で言えば、意味が解からずとも、漢字さえ読めれば正答できるはずである。ただ、慣用的な読み方を誤っているものも少なくない。まずは、正答率から見ておこう。

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |      |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|------|
| 1 | 14.0% | 2 | 85.7% | 3 | 85.3% | 4 | 1.3%  | 5  | 2.3% |
| 6 | 42.3% | 7 | 8.3%  | 8 | 43.4% | 9 | 46.8% | 10 | 0.8% |

少々読み方が難しい漢字を含むものと、呉音などで特色のある読みを多くした。高い正答率であったのは「森羅万象（しんらばんしょう）」、「順風満帆（じゅんぷうまんぱん）」であるが、それでも、「しんらまんしょう」、「じゅんぷうまんぱ」という誤答例が多かった。最も正答率の低かった「毀誉褒貶」（きよほうへん）は、前の2字を「いんよ」、後の2字を「ほうほう」と読む誤りが目立った。前者は古代中国の「殷」との誤認、後者はその旁から「乏」の音で読んだのであろう。知らない四字熟語は、その語感さえ持ち合わせておらず、「このような読み方ではおかしい」などとは思わないのかもしれない。

(5) 問五 四字熟語の意味（選択）

|   |       |   |       |   |       |   |       |    |       |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|----|-------|
| 1 | 58.1% | 2 | 58.5% | 3 | 58.5% | 4 | 71.3% | 5  | 76.5% |
| 6 | 83.4% | 7 | 50.9% | 8 | 68.3% | 9 | 62.3% | 10 | 58.5% |

最も正答率が高いのは「大義名分」、逆に最も低いのは「不易流行」であった。比較的高い平均点（6.6点）だったのは、漢字からの意味を推測することと無関係ではあるまい。同形式の「ことわざ」問題の平均点（5.9点）を上回ることも首肯されよう。

ただし、「四字熟語」としての意味をよく解かっているわけではなかろう。漢字からの意味推測も可能で、選択問題、また逆に選択肢の内容から漢字に還元して選択した可能性も否定できない。さらに、問題と選択肢の数が同数であったために、消去法で残ったものを解答に当てた、あるいは「勘」で偶然正解したことをも考慮すると、真にその四字熟語を正しく知っている確率は、かなり低くなる。意味の記述や、意味をもとにしての四字熟語記述が問題であったら、その正答率は比べものにならないほど低下したであろう事は、「ことわざ・慣用句」の問三の結果からも断言できよう。

(6) まとめ

基本的には「ことわざ」同様、「知っているか、知らないか」によって大きく左右されるが、それでも「漢字」という表意文字の性質をうまく利用できれば、その得点率も上がるはずである。しかし、実際には漢字能力そのものの低下なども影響しているのであろう。その二面性が露見したともいえよう。

ここで、設問内で最低の正答率ではない（2番目に低い7.5%）ために問題としなかった、設問1の7「□言実行（不）」について敢えて取り上げておきたい。誤答のうち約96%を「有」が

占めている。これは思うに、スポーツニュースをはじめメディアの影響が大であること、ほぼ間違いないと確信している。「不言」の反対は打消しの「不」を除いた「言」であり、仮に逆の言葉として意識的に用いるならば「言実行」となるはずである。内容的にも、言わずして実行するからこそ尊いのであり、発言したならば実行して当然である。メディアによる（悪）影響は小さくない。ましてや、「テレビのアナウンサーが使う言葉は正しい」という妄想もあろう。特殊な効果を期待しての「技巧」的使用法は、もとの言葉が正しく認識してされている際には有効であるが、その特殊使用例が「正しい」と誤認されるようでは弊害である。今回の出題は見送ったが、工業高等学校で、「才色兼備」の誤答例に「菜食健美」「彩色健美」などがあった。「健康で美しい」イメージで、野菜ジュースのコピーが原因であったと記憶する。このようなイメージの定着は、むしろ利潤追求の立場からは大成功であろうが、言語意識としては甚だ危険であり、主観的な利潤追求主義による弊害であるといわざるをえない。

殊にメディアは、「正しい」言葉で伝えることに努めるべきである。「盛り上げる」と「騒ぐ」を勘違いしたような実況ともども、誤った言葉による伝達は廃止すべきではあるまいか。特にニュースなどでは、効果を期待した意識的な「技巧」であったにせよ安易に「誤用」あるいは「借用」すべきではないし、無意識の場合には特に、各機関において厳しく対処すべきであろう。今のような状況が続くことにより、言葉が乱れ、意思の疎通に弊害をもたらす。社会が乱れることになる。また、教育の現場においても同様である。小学校の先生が「きもい（気持ちが悪い）」などと口走り、やりたくないことに対して「無理」などと言うようでは話にならない。そのような現場で、正しい言葉が学ばれているとは、到底思われない。

## 2「部首」

漢字の部首の書き抜き、部首名の記述で、出題に際して、「にんべん」「ごんべん」「しんにょう」「うかんむり」などの、よく知られているであろう部首の漢字は、敢えて出題しなかった。ただ、5「肌」は、単純に漢字の左側に位置する部位を「へん」と考えて「つきへん」と答える者がいることを予測して出題した。30点分の出題であるが、その平均得点は10.8点。10点換算すれば、わずかに3.6点でしかない。出題した漢字と正答率は次の通り。

|       |              |              |               |                |                 |
|-------|--------------|--------------|---------------|----------------|-----------------|
|       | 1 発<br>はつがしら | 2 慕<br>したごころ | 3 匠<br>はこがまえ  | 4 術<br>ぎよきうがまえ | 5 肌<br>にくづき     |
| 部首拔出  | 84.5%        | 6.8%         | 84.2%         | 21.5%          | 92.8%           |
| 部首名記述 | 6.4%         | 4.2%         | 6.4%          | 13.6%          | 50.2%           |
|       | 6 形<br>さんづくり | 7 町<br>たへん   | 8 難<br>ふるとり   | 9 珍<br>おたまへん   | 10 熱<br>れんが れっか |
| 部首拔出  | 73.2%        | 86.6%        | 67.5%         | 86.4%          | 86.8%           |
| 部首名記述 | 3.8%         | 9.8%         | 8.0%          | 37.0%          | 39.2%           |
|       | 11 丹<br>てん   | 12 斜<br>とます  | 13 隸<br>れいづくり | 14 劣<br>ちから    | 15 凡<br>つくえ     |
| 部首拔出  | 6.8%         | 53.2%        | 29.8%         | 52.5%          | 48.7%           |
| 部首名記述 | 3.0%         | 1.1%         | 0.4%          | 15.1%          | 0.0%            |

抜き出しが比較的良好に出来ているのに比べ、部首名記述は大変不出来である。

詳細な分析はほとんど必要なだろうが、5「肌」の場合、部首名記述は部首抜き出しの凡そ半分の正答率である。因みに誤答のうち、ほぼ7割が「つきへん」と解答したのは予想通りであった。15「凡」などは「凡」か「丶」しか考えられないわけで、二者選択を勘で答えても、確率的に約50%となる。部首名記述の正解者が0であったところをみると、むしろ「勘」による確率的な数値であろう。抜き出しの正答率がほぼ半数で、部首名の正答率が極端に低い12「斜」なども同様であろう。13「隸」の場合には、「士」「示」「隶」の3部品からなることが想定されるわけで、正答率が約3分の1の29.8%であるところから、「勘」による解答とはいえない。

ただ、2「慕」4「術」11「丹」などは抜き出しの正答率が低い。その傾向を考えるに「慕」などは、誤答例の大半が「マ」を抜き出して「くさかんむり」と答え、「術」も「イ」を抜き出し、「ぎょうにんべん」と答えた者がほとんどであった。類似した部首がある場合には、抜き出しにも迷いが生じる。これほど多くが「引っ掛かった」ところをみると、「知らなかった」とみて、まず間違いなからう。

いずれにせよ、部首の抜き出しにさえ「勘」が頼りとならば、その名称などを知っているとは、到底思われない。部首名記述の最高得点率が5「肌」の50.2%、次点は「熱」で、39.2%にまで落ち込んでいる。これらは、むしろよく「知っている」類であろう。9「珍」の「おうへん」、14「劣」の「ちから」も勘によっても何とか答えられそうな類であり、他は惨憺たるものである。

漢字の部首に対する認識の低さを如実に示しているといえよう。

総じて、「学び」なくして「知識」はない。

### III 付・問題再出に関して

総合問題として行ったテストには、ほとんど既出の問題を再出したのであるが、幾つか、初出の問題をも出題した。総合問題の稿者担当分野の出題は以下の5設問。

| 出 題                  | 得 点 | 平均点 (10点換算) |
|----------------------|-----|-------------|
| 問1 ことわざ・四字熟語穴埋め (記述) | 10点 | 9.0点        |
| 問2 ことわざ・四字熟語の意味 (選択) | 10点 | 9.7点        |
| 問3 ことわざ・四字熟語の読み      | 5点  | 3.8点 (7.6点) |
| 問4 使い方の正否 (○×)       | 5点  | 4.6点 (9.2点) |
| 問5 漢字の部首名 (記述)       | 5点  | 3.4点 (6.8点) |

正答率は84.6%と高い。総合問題における既出問題の割合を65%程度としていたため、35問中9問を新出問題とした。その9問の正答率は次の通り。

問1 ⑤「□に交われば赤くなる」(朱) 96.0%

⑩「捲□重来」(土) 83.7%

問2 ⑧「岡目八目」97.7%

問3 ①「角を矯めて牛を殺す」33.5%

④「羊頭狗肉」 81.4%

⑤「臥薪嘗胆」 91.4%

問4 ④「気のおけない」 83.3%

⑤「固唾をのむ」 97.3%

問5 ⑤「初」(刀・かたな) 51.1%

総論で触れられると思うが、既出の問題が、その正答率を大幅にアップさせたことはいうまでもない。ただ、「ことわざ・四字熟語」に関しては、十分に認知、理解していない以上、全くの新出問題を出題したところで正答率が低いことなどは調査するまでもない。そこで、既出問題の別形式での出題を優先させた。たとえば、先の出題で読みを問うた「捲土重来」を穴埋めに、補充問題で出題した「角を矯めて牛を殺す」を読みで出題するといった具合である。これによって、一度「触れたことのある」ことわざや四字熟語に対して、どの程度の認識、理解を示すかをうかがうことができる。結果的には、何らかの形で触れたことのあることわざや四字熟語については、理解、認識する者が多かったということがほぼ明白となったことを、再出問題に関する報告としておきたい。

#### IV おわりに

さて、今回の調査において、「ことわざ・慣用句」「四字熟語」「漢字の部首」などの能力は、決して高いとはいえないことが十分に確認できたことと思う。知らないことを補うために、その場に持ち合わせた情報を出来る限り活かして、推理を働かせようとする傾向などがうかがわれて、興味深い一面も垣間見ることができた。ただ、これらは決して褒めるべきものではなく、全て「基礎的な知識の不足」の結果に他ならない。「知らない」ものは、いくら考えても答えられないのである。

しかし、逆に、一度触れたことのある「ことわざ・慣用句」「四字熟語」などは、かなりの高確率で身に付くものであることもわかった。触れれば、そして教われれば身に付くわけである。その能力が低いということは、触れていない、教わっていないことに他ならない。

知識は、始めから持ち合わせているものではない。必ず、外部からの情報として吸収される。その手段としては、「教育」「メディア」「コミュニケーション」が大きな要素となっていると、稿者は考えている。まずは、正しく教え、身に付けるさせることが重要であろう。便利な世の中になり、電子辞書などが普及している。しかし、人は辞書に頼って言語を操るわけではない。頭の中の引き出しに言語知識を収集・整理し、時や場、相手に応じて、適切にその引き出しから順序良く引き出してくることが肝要である。「詰め込み教育はやめましょう」などといっていることが、いかに馬鹿げたことであるか、国語的能力の一端をみても、容易にわかるはずである。その教育の成果を以って他人とコミュニケーションをとり、あるいは、メディアを通してさらにその言語知識は増大させることができれば、言葉は、より豊かな思考やコミュニケーションの手段

となるはずである。

いくら外国語を学んでも、そこで語るべき内容を持ち合わせていなくては真の「国際人」とは呼べない。長い歴史と伝統に育まれた我が国の文化や思想の多くは、言葉を媒体として伝えられている。言葉を見直すことは、我が国を見直すことであり、我が国を他国に伝え理解を求めることが、必要であろう。

今後、日本語能力の向上、国語教育の徹底・充実が不可欠であることを強調しておきたい。紙幅の都合で、意を尽くさぬところが多かった。機を改めて卑見を述べることにしたい。